ITP-EUROPA 委員会　御中

2010 年 9 月

東京外国語大学 博士前期課程　吉崎 知子

派遣報告書

研究テーマ：　ポーランド文学：イェジー・アンジェイェフスキ『聖週間』

派遣先：　ポーランド、リトアニア

派遣期間：　2010 年 8 月 23 日～9 月 5 日

派遣の目的：　国際移動セミナー《クラクフからヴィリニュスへ》
ヨーロッパ東部境界地域の共有遺産研究――第２回
The International Itinerant Seminar
The Common Heritage of the Eastern Borderlands of Europe, Part II

＜国際移動セミナー概要＞

【内容】

① ヨーロッパ東部境界地域(Kresy)の実地調査

② ポーランド・リトアニア連合国家の歴史・文化の実地研究

③ 国境地帯における、ポーランド、ウクライナ、ベラルーシ、リトアニア、ユダヤ人など多民族文化の探索

④ 各地の研究者との議論

⑤ セミナー参加者による講義

【主催】International Cultural Centre in Cracow (ICCC), Poland
EU Institute in Japan

【立案・実行】東京外国語大学 関口時正教授、篠原琢教授、ICCC

【訪問地】Kraków, Lublin, Sejny, Kaunas, Vilnius を拠点に、以下の都市を訪問した。
Pacanów, Sandomierz, Radzyń Podlaski, Siemiatycze, Knyszyn, Ciechanowiec, Tykocin, Wigry, Augustów, Šiauliai, Klaipėda, Palanga, Trakai, Druskininkai

20 名の参加者が大型観光バスで一つの都市に数泊し、そこを拠点に周辺の町を訪問した。都市ごとに入れ代わり立ち代わり、厳選された現地の研究者がメンバーに加わった。彼らは

単なるガイド役ではなく、学術的な見地から解説を加え、質問に答えてくれた。彼らとの議論において、時には民族的、政治的な理由や文化の相違から緊張感が漂ったが、それこそがセミナーの醍醐味と感じた。歴史、政治、文学など専門を異にする参加者が意見を交換することもまた有意義であった。「国際文化センター(ICCC)」所長ヤツェク・プルフラ教授およびバルバラ・シペクさんによって、移動中の時間をも有効利用しての解説が行なわれた。とりわけ、両名の専門である文化遺産、歴史的建造物に関する解説は素晴らしかった。

派遣目的：

私の関心は、ポーランド文化におけるキリスト教とホロコーストの問題であり、修士論文では、アンジェイェフスキの中篇小説『聖週間』を扱う。論文の中心テーマは「ホロコーストに直面したポーランド人」である。それを成功裡に展開できるかどうかは、前提となるポーランドにおけるユダヤ人の歴史を、いかに真実味をもって議論できるかいかんにかかっている。そのため、かつてポーランド人とユダヤ人が共生した地域を訪れ、ユダヤ人の足跡を追いたいと願っていた。

以上の理由で、ポーランド、リトアニアにまたがる地域に実際に足を運ぶ「国際移動セミナー」に参加することは修士論文の執筆に大変有意義と考え、「短期派遣 EUROPA」に応募した。

派遣の成果：

派遣の最大の成果は、ポーランドにおけるユダヤ人の足跡を実際にこの目で確認できたことである。ここでは、最も印象的だった訪問地二つを挙げる。

もっとも印象強かったのは、ティコチン(Tykocin)というポーランドの町である。かつてユダヤ人人口が最も多かったポーランド北東部に位置する大都市ビアウィストク(Białystok)に程近いティコチンは、第二次大戦中ユダヤ人が人口の 50%を占め、1941 年 8 月 25 日、26 日の二日間でナチによりすべてのユダヤ人住民が抹殺されたという。残されたシナゴーグに入ると、白い壁は一面、ユダヤ人の手書きと思われる祈祷文で覆われていた。その煤けた色からは、ここでユダヤ人が祈り生きた証を、今回の訪問地の何処よりも鮮明に感じ取ることができた。今はがらんとしたシナゴーグの奥は博物館となっており、そこでこの町の模型を使って説明を受けた。キリスト教の教会からさほど離れていない所にシナゴーグを中心とするユダヤ人地区があった。この町こそ、ポーランドのユダヤ人社会の縮図のようで、もっとも理解できた気がしている。

次に心に残った訪問地セイニ(Sejny)は、リトアニアとの国境に位置するポーランドの町である。訪問したシナゴーグは、建物内部がギャラリーとなっており、その日も展示が行われていた。その中心には舞台があり、そこで我々は The Borderland Foundation の担当者とのディスカッションを行なった。「ユダヤ人は姿こそ今はもうないが、彼らが遺したシナゴーグで、今こうして我々は多文化交流の恩恵に与っている」という彼の言葉には、考えさせられるものがあった。シナゴーグに隣接する The Borderland Foundation 本部には、ユダヤ人を含むベラルーシ、ウクライナほか様々な文化に関する文献や資料を備えた図書館があり、ユダヤ人についてもインターネットで文書にアクセス可能とのことで、貴重な情報源を得た。

以上、自分の研究にとって最も有益だった土地がまさに国境地域に集中したというのは、今回の派遣の狙いが的中したと言えるであろう。ワルシャワやクラクフ、ルブリンその他の大都市には渡航経験があるが、ユダヤ人の居住地という側面から聞き知っていたポーランドの地方都市、小都市を、いつか訪れてみたかったのだ。

今回の派遣により、アンジェイェフスキの『聖週間』という修士論文のテーマに確信を得たとともに、新たな着想が湧いた。さらに望外の収穫として、自分のこれからの人生における研究テーマが確定した。『聖週間』という文学作品の分析に必要な範囲にとどまらず、「ポーランドのユダヤ人」について踏み込んで研究し、ホロコーストを中心としたユダヤ人の回想録の翻訳などを自分のライフワークとしたいとの希望が、決定的なものとなったのだ。

ポーランドで感じた事柄を補強し、また新たな視点を与えてくれたのが、リトアニアの首都ヴィリニュス(Vilnius)だった。セミナー全行程の終了・解散後、ユダヤ人専門家の先生方を中心に、帰国のフライトまでの半日で「ユダヤ人関連ガイドブック」なるものを片手に散策をした。ヴィリニュスといえば、第一次大戦前にユダヤ人が全人口の 41%を占め（64000 人）「北のエルサレム」と呼ばれた街である。ところが、実際に「ガイドブック」の地図をたよりに所在地を訪ねると、シナゴーグと思しき建物のシナゴーグに特徴的な窓の形にベニヤ板が張られていたり、「ユダヤ人通り」(Zydu Street)に続く住宅地の壁には落書きがされ、やはり窓は板で封をされていた。「大シナゴーグ」(Great Synagogue of Vilna)が位置した場所は、小学校となっていた。そこにユダヤ人が存在したことが、なかなか想像できなかった。もっとも、ポーランドと比べて、元ユダヤ人地区の管理状況が劣悪かどうかは、この度の訪問では判断できるものではない。また、リトアニア人のユダヤ人に対する感情も、出会ったリトアニア人の数や職業、年代も限られているため、軽率に感想を述べることはできない。しかし、そこで感じた印象から、私は論文執筆にあたり、「ポーランドにおけるユダヤ人」「ポーランド人とユダヤ人の歴史的関係」を展開するにあたり、周辺国におけるユダヤ人、周辺国の人々とユダヤ人の歴史的関係も、調査し把握することの必要性を感じた。

今回の派遣で、ポーランド人にとって、タブー視したり敢えて目を背けたりしなければ存在してきたのがユダヤ人であり、ユダヤ文化であるということを確認できた。どうしても思い描くことができなかった「ポーランドに生きたユダヤ人」を、今回の渡航を通してついに感じることができた。ただ、それは実際の姿ではなく、「遠き日の思い出」いわゆる「レガシー」のような存在であるということだ。想像できなかったのは、ユダヤ人が現在ではポーランドにはほとんど存在しない故であるが、今回訪問したシナゴーグやユダヤ人街に、ユダヤ人が「通り過ぎた跡」を感じることができた。ユダヤ人は、ポーランドにおいて「過去の人」であるという認識を新たにした。したがって、修士論文執筆にあたり私がもっていた目的意識である「現在のユダヤ人とポーランド人の関係」「若者の間でのユダヤ人感情」といった点は、対象外であると分かった。むしろ、ポーランドがユダヤ人の歴史において、ホロコーストが起こった忘れ得ぬ地であることは間違いなく、その時代を回顧して研究することには大きな意味があると思われる。中世からユダヤ人にとって安住の地であったポーランドで、両大戦間期のナショナリズムが高まりとともにポ

ーランド人のユダヤ人感情が変質し、これを素地として第二次大戦でナチ占領下のポーランドで展開されたホロコーストという歴史的場面を題材とした『聖週間』で、じっくり分析したいとの意欲を新たにしている。

今後の課題：

今回の派遣で得た貴重な資料やデータソースをもとに、読み込みを進め、修士論文の執筆に取り掛かる。専門家から受けた助言や、いただいた文献を読む。ヨーロッパ人から見たユダヤ人ではなく、ユダヤ人そのものについて、研究を進める。具体的には、ユダヤ通史およびユダヤ教への理解を深める。ユダヤ人およびユダヤ教の定義や概念は実に膨大だからである。これらは直接的に論文上で述べなくとも、『聖週間』の主人公の一人であるユダヤ人女性イレーナをはじめとするユダヤ人登場人物を迫力をもって生々しく執筆するためにも有用であると考える。以上を踏まえ、渡航の成果をもとに、論文を執筆する。現状ではポーランド人によって書かれた論文や資料を引用に用いているが、ユダヤ人によって書かれた論文や資料、特に回想録を読み、立体的な分析を行ないたい。

今回の派遣によって得た貴重な知見は、帰国後まもなく行なわれた「ITP-EUROPA および短期派遣 EUROPA 海外派遣報告会」での発表に終わらず、様々な場で発表を行ない、成果を還元していく所存である。今回の実地研究で理解が進んだポーランドのユダヤ人の歴史について、体系的でわかりやすい纏めも作成したい。

おわりに：

参加者の大半が教授や専門家である中、大学院生（博士前期課程）という肩書で参加していたら、心細かったに違いないと思う。しかし、「短期派遣 EUROPA」からの派遣との自覚は、心強くあっただけでなく、帰国後にプレゼンテーションや報告書の作成という場が与えられることにより派遣中のモチベーションが向上する効果があった。さらに、今後は成果を還元していこうという責任感と展望が与えられた。航空券代が通常期の 2 倍にも高騰する夏期に行われる当セミナーの参加費用は大きな負担となるため、このような条件で派遣していただくことにより、安心して研究に集中できたことは言うまでもない。厚く御礼を申し上げたい。

以上